

論文

彼女たちはなぜチマチョゴリ制服を着続けたのか

——朝鮮学校女子学生らの抵抗をめぐる——

金 汝卿[†]

要約：朝鮮学校の女子学生は朝鮮半島の伝統衣服を制服化したチマチョゴリ制服を着用する。1990年代から通学路でチマチョゴリ制服切り裂き事件が急増したため、通学時は西洋風の制服を着用し、学校でチマチョゴリ制服に着替える。女子学生は制服を「民族の印」として決定した「上（学校側）」と、「差別の印」として攻撃した「外（日本社会側）」に対し、チマチョゴリを非言語的手段として用いてきた。本稿では、チマチョゴリ制服文化にみられる「学生による意味付与」、チマチョゴリ制服切り裂き事件にみられる「日本社会による意味付与」を論じる。この2つの意味付与が逢着する事例として、1988年京都の朝鮮学校の学生らが制服を着続けようとした女子学生の「抵抗」を考える。

キーワード：在日朝鮮人女性、朝鮮学校、チマチョゴリ、意味付与、交差性

目次

1. はじめに
2. チマチョゴリの制服化と女子学生の制服文化
 - 2-1. チマチョゴリが朝鮮学校の制服になるまで
 - 2-2. 朝鮮学校ならではの制服文化
3. 日本社会のなかでのチマチョゴリ制服
 - 3-1. マスメディアにみる朝鮮学校学生へのヘイトクライム
 - 3-2. チマチョゴリに対して日本社会が付与する意味
4. 「負けない」表象としてのチマチョゴリ制服
 - 4-1. 京都朝鮮中高級学校女子学生たちの闘い
 - 4-2. 第二制服の登場
 - 4-3. 継承される〈生きる方法〉としてのチマチョゴリ制服
5. おわりに：チマチョゴリ制服に「抵抗」の意味がなくなる時

1. はじめに⁽¹⁾

朝鮮学校は在日朝鮮人が朝鮮の言語や歴史、文化などを教えるために設立され、全国で幼稚園から大学校まで展開している、日本で最も大きい規模の民族教育（ないし外国

[†]同志社大学大学院社会学研究科社会学専攻博士後期課程

*2022年9月29日受付、2022年9月30日掲載決定

人教育)機関である。朝鮮学校の中等教育課程(中学校相当を「中級部」、高校相当を「高級部」と呼ぶ)の女子学生⁽²⁾は、朝鮮の伝統衣服であるチマチョゴリを制服化したものを校内で着用する。ただ、1990年代からチマチョゴリ制服が切り裂かれる事件が急増したため、2000年頃から「第二制服」と呼ばれる日本の一般的な制服と同様の服を通学時に着用して登校し、学校でチマチョゴリ制服に着替えるようになった。本稿は、第二制服が登場するまで朝鮮学校の女子学生がチマチョゴリ制服を守るために抵抗した過程と、その後の変化に注目する。

これまで朝鮮学校のチマチョゴリ制服については、「切り裂き事件」をはじめとした朝鮮学校の女子学生に向けられたヘイトクライムおよびその背景にある差別を論じたものが多い(日垣 1991; 下嶋 1994 など)。チマチョゴリ制服を女性が着るという実践よりも、朝鮮学校ないし「北朝鮮」の象徴として攻撃のターゲットとなる側面が強調されてきた。チマチョゴリ制服をターゲットにした事件は、実際に起きた大きな問題であったため、その点に注目されるのは当然である。その後、そこから一步進んで、女性のみが民族を表象する制服を着ることが「女性差別」だという議論が提示されるようになった。女性たちの意に反して民族的象徴を一方的に押しつけられたのであれば、その指摘に意味があるだろうが、果たしてそうだろうか。

そうした単純な「女性差別」言説に違和感を覚えた韓(2016)は、チマチョゴリ制服を実際に着用した女性側の経験と語りに注目した。韓は、チマチョゴリ制服の歴史と文化、女性たちの思いをリアルに伝えながら、制服がトップダウンで導入されたというよりは、女子学生が自律的にチマチョゴリを着用したことからはじまったことを克明に実証した。すなわち「上」の男性たちから押しつけられたものというよりは、「かわいさ」といった意味づけを含む女性発のエスニック・アイデンティティの存在を明らかにした。しかし、チマチョゴリ制服の存続と意識変化の起点となった「切り裂き事件」と、それ以降のことまでは議論の射程に入れていない。チマチョゴリ制服がヘイトクライムやレイシャルハラスメントの対象として攻撃され、登下校時にチマチョゴリ制服着用を控えようという動きが進んだなか、女子学生による抵抗があった。ここには朝鮮学校の女子学生をターゲットにした民族差別と、制服着用を決定する朝鮮学校内部社会のヒエラルキーに向き合おうとした女性たちの姿がある。

本稿で注目するのは、チマチョゴリ制服をとりまく女子学生の抵抗である。それは意図的なものから無意識に行われるもの、日常的なものから断片的に行われるものまで幅広い。通常であれば「反抗」や「逸脱」としてしか捉えられなかったことが、別の状況では抵抗になることもある。制服をめぐる文化や、本来決められた規律に反して制服を着用することは、朝鮮学校だけのものではない。たとえば、韓国で学校に通った筆者は、学校で定められた制服のスカートの代わりに、校則違反である体育服のズボンを着

るような行動をしたことがある。これは「上」から押しつけられた規律やジェンダー分制に対するエイジェンシー (agency)⁽³⁾の現れとも言える。いかに些細な行動であっても、「上」からだと「反抗」や「逸脱」にみえる行為が、「下」からだとして抵抗の意味を有する場合がある。もっとも、こうしたささやかな抵抗としての制服に対する記憶が朝鮮学校女子学生らの制服に対する思い出と重なる部分はあるが、筆者の場合は制服を守らなければならないという環境におかれたことはなかった。朝鮮学校の女子学生たちは、チマチョゴリ制服を通して「上」(学校側)が決定した制服を「下」(学生側)から自らの文化にすることで向き合うと同時に、「中心」(日本社会)からの差別に対抗して「周縁」(在日朝鮮人社会)からの抵抗を常に行ってきた。さらに「切り裂き事件」では、チマチョゴリ制服の着用を通して女子学生が自らチマチョゴリ制服を守る行為につながり、朝鮮学校の中でも實際上、大きな影響を及ぼした抵抗となった。

その抵抗の背景には、チマチョゴリ制服をめぐる女子学生たちのエイジェンシーがある。エイジェンシーの考察にとって重要なのは、民族とジェンダーについて外部から「付与された意味」に対して、女子学生自らが「付与する意味」である。朝鮮学校の学生たちは「上」からの「意思決定 (decision-making)」を前提としつつも、そのなかで独自の「意味付与 (sense-making⁽⁴⁾)」をしていった。ところが、チマチョゴリ制服着用が朝鮮学校の学生であることを外部から識別可能にする結果となり、偏見をとともう「付与された意味」にもとづいた暴力行為の対象になったのである。それに対する抵抗を可能にしたのは、朝鮮学校の女子学生が制服文化を通じて自ら「付与する意味」であった。それがチマチョゴリを通して、日本社会や朝鮮学校の「上」から「見られる」ことに対して、学生たちは自ら「見せる」という行為で発現したのである。

こうした女子学生のエイジェンシーと抵抗を明らかにするために、かつて朝鮮学校に通った女性教員や女子学生の経験に着目する⁽⁵⁾。日本全域に分布し、各地域の在日朝鮮人社会の支えによって設立された朝鮮学校は、それぞれに地域性があるが、ここでは京都の学校を主な対象とする。本稿では大きく3つに分けて論じる。まずは、チマチョゴリ制服の歴史、文化を探る。その際に、女子のみならず男子学生の制服文化も視野に入れることで、学生が制服に意味を付与する過程を交差性 (intersectionality) の観点からとりあげる。次に、それに対して日本社会はどのような意味を与えたのかを明らかにするために、朝鮮学校学生を対象にしたヘイトクライムの発現過程を、新聞記事を通して分析する。日本の政治、社会の関わりの中で学生たちが付与したこととは異なる意味がチマチョゴリ制服に与えられ、通学時に第二制服を着用することに繋がる一連の過程を述べる。最後に、こうした「学生による意味付与」と「日本社会による意味付与」が逢着する事例としてチマチョゴリ制服切り裂き事件当時の学生たちの抵抗に注目する。そこには学生たちがチマチョゴリ制服の着用を通じて発現しようとした「負けない」精神

がある。「上」から決められ「外」から攻撃された民族の象徴としてのチマチョゴリ制服を、女子学生が「自分たちのもの」として捉え、守り続けようとした行為から、女子学生の〈生きる方法⁽⁶⁾〉を描き出すのが本稿の目的である。

2. チマチョゴリの制服化と女子学生の制服文化

2-1. チマチョゴリが朝鮮学校の制服になるまで

朝鮮学校のチマチョゴリ制服は、1920年代に西洋式を志向する「新文化」に対抗して朝鮮半島で登場した女学校の制服にその淵源がある。1910年に日本の朝鮮植民地支配が正式に始まったことにより朝鮮人のあいだでは「民族的自覚」が強くなり、その一つの表れとしてチマチョゴリの再評価と改善が進んだ。1920年代に登場した「新女性」の中では洋装の着用を進んだ一方、他方ではチマチョゴリを現代的に改良するようにもなった(김미래 2009)。女性が学校(特に中等以上の教育機関)に通うことが当時は珍しかったため「新女性」と呼ばれた。とはいえ、全ての学校がチマチョゴリを制服にしたわけではなく、服装が比較的自由な学校もあれば、チマチョゴリか洋装制服のいずれかを選択できる学校もあった。チマチョゴリ制服の場合、主に赤色や黒色のチマ(スカート)に白いチョゴリ(上着)とする学校が多かった(전언후 2002)⁽⁷⁾。こうした当時の女子学生の典型的な姿は、朝鮮学校のチマチョゴリ制服のルーツともいえる(韓 2016)。

しかし、チマチョゴリ制服がいきなり朝鮮学校の制服になったわけではない。植民地支配から解放された朝鮮人が日本各地にいわゆる国語講習所を開いたが、1945年10月に形成された在日本朝鮮人連盟(以下、朝連)によって組織化された朝鮮人学校にもチマチョゴリをそろって着用する場合があった。たとえば、京都府宇治市のウトロ地区にあった朝連久世学院の記念写真では、図1のように女子学生全員が同じチマチョゴリを着ている⁽⁸⁾。学芸会などの学校行事ではチマチョゴリ制服を着用した(中村 2022: 76)。朝鮮人学校の数には1947年には全国578校にいたる(呉・成 2007: 122)。当時の写真・映像資料をみると⁽⁹⁾、一部の学生が生活服としてチマチョゴリを着用しているが、朝連久世学院のように制服として揃って着用するのは稀である。当時はまだチマチョゴリ制服が定着していなかったが、朝連久世学院の場合は、この地で朝鮮人学校が発することを祝う意味で学生全員が同じチマチョゴリをそろって着ていた特殊ケースと考えられる。

チマチョゴリ制服が朝鮮学校で制度化される経緯と時期は、資料の限界によって正確に分からないが、韓(2016)はインタビュー調査や新聞記事などを根拠に、愛国心が高まっていく社会的背景のもとに⁽¹⁰⁾、女子学生が自発的に着ていたチマチョゴリが1961

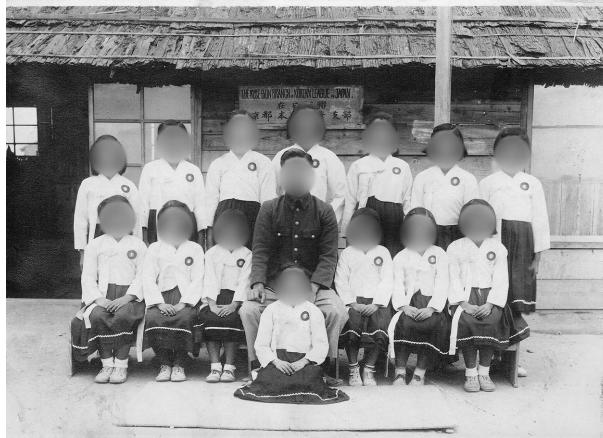


図1 「朝連久世学院」の学生たち（1946年）
（出典）ウトロ平和祈念館提供

年から制服化されはじめ、1963年に全国一律化されたと推定する。京都朝鮮中高級学校の場合、1960年から1963年の間は、男子学生は日本の他の学校と同様の学生服で、女子学生はセーラー服だったが、チマチョゴリを持っている学生はそれを着用しても良かった（板垣編 2019: 104）。1962年から1965年まで京都朝鮮中高級学校に通ったCMさんによれば、制服化されても本人を含め、引き続きセーラー服で学校に通う学生も少なくなかったが、高校2年の1963年頃からはチマチョゴリ制服を着用するようになった⁽¹¹⁾。京都朝鮮中高級学校の卒業アルバムをみると1962年の卒業生は洋服を着ており、チマチョゴリ制服の女子学生は1人しかいない。しかし、1963年の卒業生は全員チマチョゴリ制服を着用している（図2参照）。1963年時点では、まだ京都の全学生がチマチョゴリ制服を着用していなかったはずだが、卒業式という晴れ舞台だったため、このときだけは全員がチマチョゴリ制服に揃えたのかもしれない。いずれにしても、1963年の全国一律化を受けて京都でも急速にチマチョゴリ制服が拡大していたと考えられる。

京都ウトロ地区の朝連久世学院の場合や京都朝鮮中高級学校でチマチョゴリ制服が定着していくなかでも、晴れ舞台にチマチョゴリをそろって着ていたことが分かる。一方、朝鮮半島の両国においてチマチョゴリは朝鮮人の日常服であったものの、制服化されることはなかった。朝鮮学校制服のようなトンチマ⁽¹²⁾は、1960年代までは両国で若い女性の日常服として愛用されたが、大韓民国では1960年代から「良妻」の象徴だった伝統的なスタイルが流行り、1970年代以降には洋装が日常服として定着した（召亭 2007）。朝鮮民主主義人民共和国では1950年代から1960年代にかけて織物生産量増加による衣生活の変化とともに、作業の便宜性から日常服として洋服が好まれた（イ亨 2019）。生活服としてのチマチョゴリを朝鮮民主主義人民共和国で制服として採



図2 京都朝鮮中高級学校の卒業アルバム写真（上 1962 年，下 1963 年）
（出典）京都朝鮮中高級学校提供

用するようになったのは、朝鮮学校制服の影響と思われる。S 先生によれば、朝鮮学校からの訪問団による公演がきっかけになったと言う⁽¹³⁾。

1988 年の冬から 1989 年の正月を迎えるために、ウリナラ〔わが国〕に 120 何人かの小学校 5 年生から高校 2 年生、3 年生の子どもを連れて行ったことがあるんですよ。で、その舞台で、「どんなに嵐が吹いても、どんなに暴力に振るわれても私たちは絶対に、このチマチョゴリを脱ぎません」という舞台を作ったわけですよ。それを当時の金日成主席がみててね、ずっと泣いてはるんですよ。それまでウリナラ行っても大学生もみな普通の洋服だったんです、制服が。ところが、それから 2, 3 年してからかな、大学生も全部チマチョゴリを制服にするように国のほうで決めて。で、行った時に「何かチマチョゴリ多いですね」って言ったら、「あのときの在日の子どもたちの姿を見て国のほうでそうすることにした」と。〔中略〕そのときの子どもたちの姿が、在日にとっては普段戦ってるというあれだけど、ウリナラ、祖国の人たちにとっては衝撃だったんでしょうね。そんな中で子どもたちが朝鮮学校に通って、それを守ってる人たちがいるんだっていうこと、そこにね、舞台も大きかったんですけど、6,000 人入る劇場だったんですけど、皆立ち上がってすごかったんですよ。

平壤の女子大学生が朝鮮学校と同じ色と形のチマチョゴリを制服として着るようになったのは、朝鮮学校の学生が「祖国訪問」した時に演じたチマチョゴリ制服に関する創作公演がきっかけになった。在日朝鮮人にとってチマチョゴリを着るということはアイデンティティに関わる日常の闘いを意味する。それに対して、朝鮮半島に住む人たちは自分の民族的アイデンティティを然程表象する必要がなかった。チマチョゴリに含まれた思いが公演を通じて朝鮮民主主義人民共和国にも伝えられ、チマチョゴリを制服として採用するようになったと言う。つまり、学校のチマチョゴリ制服は在日朝鮮人から「祖国」へと、いわば逆輸入されたのである。

以上のように、朝鮮学校では、女性が自律的に着て登校したチマチョゴリが1963年から全国で制服化されはじめ、徐々に「朝鮮民族の女子学生」を代表するものになった。チマチョゴリ制服の着用が規範として定められることによって、朝鮮学校的女子学生なら誰もが着用して「当然なもの」になった。その結果、朝鮮学校的女子学生にとってチマチョゴリは「日常服」として位置づけられ、次節で述べるように、朝鮮学校的女子学生ならではの制服文化をつくりあげていくことになる。

2-2. 朝鮮学校の制服文化

朝鮮学校的女子制服は、チョゴリ（上着）とプリーツが多く入ったチマ（スカート）で構成される（図3）。夏には白のチョゴリに黒や紺のチマ、冬には黒や紺のチョゴリに同じ色のチマを組み合わせる。地域や学校によって微妙な色の差やプリーツの大きさの違いがある。こうした差は、地域ごと、学校ごとの個性的な制服文化の形成につながっている。

とくに、毎日の制服の手入れであるトンジョン（替え襟）の付け替えとチマのプリーツのシワ伸ばしは、朝鮮学校に通っていた女子学生は誰もが持っている思い出である。



図3 チマチョゴリ制服のイメージ
(出典) 著者作成

1989年から1995年まで京都朝鮮中高級学校に在学していたKHさんは⁽¹⁴⁾、チマチョゴリ制服を毎日手入れしながら、自分の個性を表してきたと語る。

中学からもチョゴリがすごく好きだったので。見た目は全部一緒かもしれないんですけど、例えばトンジョンをレースにしたりだとか、袖の裏が見えないけどおしゃれにセットン〔朝鮮風な柄〕にしたりだとか、ブリーツは命懸けで綺麗にしたりだとか、自分のなかですごく愛着があって。チョゴリに対してはそういう思いをずっと持ってたんだと思うんですよ。(KHさん)

このように、トンジョンや袖の裏側に好みの布をあてるようなアレンジをしていた。すぐには目立たないため、教員に怒られることも少なく、チマチョゴリ制服の本来の形にも影響しない。しかし、小さな変化を与えることで、女子学生の個性やこだわりを反映する「小さな反抗」となった。これは単に個人的な作り替えであることを超えて、朝鮮学校的女子学生ならではの制服文化を創り上げたといえる。というのも、そうしたこだわりを反映したチマチョゴリ制服を扱う業者が現れたからである。日本の学校制服と同様に、朝鮮学校でも学校が指定している制服のみを扱う専門店がある一方、そうした規格から外れた制服を取り扱う店も存在していた。1984年から1993年に京都朝鮮中高級学校に在学した女子学生たちは次のように語る⁽¹⁵⁾。

GSさん：今の私が働いている職場のところがちょうど既製のチョゴリを作る場所やったんですよ。そのすぐ近くに既製じゃないチョゴリを作るところがあった。

MAさん：やばい。なんやったけ、「宮本」。

GSさん：みな「宮本」っていうところ行ったんですよ。

MAさん：先輩たちに聞いて、「宮本、行き」っていわれて。

GSさん：その既製の作る間近くにあるんですよ。そこに行って、嫌みみたいにみんな。

RKさん：だからそれを買えへんかった後輩にチョゴリもあげた記憶がある。

1980年代半ばから1990年代初半までの京都は、規定の色より少し明るい紺色の「ハナコン（花紺）」と細かいブリーツが流行っていた。「花紺」は「花紺青」とも言われる日本語の色名称だが、それが京都の朝鮮学校におけるチマのこだわりの色味を表すことばとして、女子学生のあいだで広まっていた。中学校の制服をそのまま着ていたRKさんは、高校に入ってからアルバイトをして、流行りの花紺の細いブリーツのチマを手に入れた。こうした規格から外れる制服は、学校指定の店では注文できなかったため、別の店を利用した。現在は京都で正規店もなくなり、大阪から人に来てもらうような注文方式に変わっているが、当時は京都でも業者が複数あった。このように、チマチョゴリ制服の改良が盛んだったこの時期は「京都だけの流行り」をつくりあげ、それを対象にした店まで出現させたのである。

女子学生の制服の文化は、日常的な行為としても現れた。毎日スカートを布団の下に敷いてプレスしたり、立ち上がる度に常にプリーツを整えながら座ったりしていた。

女の子の場合、着替えると言っても、あのチマチョゴリって結構かさばるんですよ。生徒たちはみんな「チマ、チマ」[と言う]。そのひだあるでしょう。あれに命をかけていたからね。今ほら、アイロンでも良いものがあるって、寝るときにぱっとおいといたら綺麗に襞取れますでしょう。昔、そんなのないから、お布団の下に引くわけですよ。畳のあとが付いたりするけど、毎日「寝押し」っていうんだけど、寝押しをして、朝はもうフィットしているわけね。だから椅子に座るときにも時間かかるわけですよ。(S 先生)

スカートのプリーツにシワができることは、女子学生にとってプライドにかかわる問題であった。スカートにシワができたことで体操服に着替えて帰宅した経験や、先輩にシワのことで注意された経験を語る人もいた。スカートにシワができないように常に注意して生活しながら「チマ、チマ」と言う口癖は、単に外見を整えるだけではない。チマチョゴリ制服を端整に着こなすことは、朝鮮学校の学生であることを常に意識した結果だと言える。チマチョゴリ制服が「見られる」ことに対して「見せる」という女子学生らのエイジェンシーが反映され、常に意識を傾けていたことが示唆される。チマチョゴリ制服を「見せる」ことは、女子学生にとって楽しさにもつながっていた。GS さんは通学路で制服を褒められた経験を次のように覚えている⁽¹⁶⁾。

やっぱり冬のチョゴリより夏のチョゴリのほうが目立つんですよ。上が白でチョッサムって言って。だって見たこともないですよ、日本の人からしたら。「何、あの服」みたいな。でも「すごくかわいいね」って言うってくれる人も多くて、すごく嬉しかったです、それは。バスに乗ってて、急に前に座ってるおばさんが「その服かわいいね」とか「どうなってるの、リボン?」とか。(GS さん)

日本の地域社会においてチマチョゴリ制服は珍しいものであり、目立つものであった。そのせいで時に暴言の対象ともなったが、一方で制服が媒介となり、楽しい会話につながることもあった。通学時にチマチョゴリ制服を着ることは、「朝鮮人女性」であることがいわば「むき出し」になることである。そのためにエスニックな象徴性も帯びながら「見られる」ことを意識した「見せる」ための文化が形成されたとも言える。毎日の手入れや生活習慣、制服のアレンジは、チマチョゴリ制服文化が地方ごとに、あるいは学校ごとに特色を帯びながら朝鮮学校のサブカルチャーになっていった。

こうした朝鮮学校ならではの制服文化は、女性だけのものではなかった。日本の一般的な「学ラン」を着ていた男子学生たちも「やはり朝高らしくなくて、日本人っぽいかないと気後れた」ので、高い金額を払って仕立て直したり、上着の裏地に朝鮮風の刺繍をほどこしたりする学生もいた(金漢一 2005: 46)。1970 年代半ばに朝鮮学校に通っ

た P 先生は、男子制服について次のように語る⁽¹⁷⁾。

〔日本社会に〕何で勝つねやんって、喧嘩かサッカーしかないんです。その2つは「絶対負けたらあかん」と僕ら教えてもらいましたよ、小学校の時から。だから街出てさええ格好して歩かんとあかんです。全然弱くても、喧嘩で負けるのもあるんですけど、でも怖がって行かないとか、そんななったら「根性なし」って言われて。通学路でも何でも、身を張って歩かなあかと、学ランも一緒ですよ。〔中略〕学生服を作るのにね、作りに行くんですよ。学生服を作るのが大阪にも京都にもあるんですけど、僕ら名古屋まで行ってました。形がちょっとずつ違うんですよ、それが格好いいって言って。〔中略〕関東は革靴なんですけど、関西は運動靴なんです。真っ白の運動靴に真っ黒の学生服着るんですよ。靴がちょっとでも汚れたら大喧嘩です。新しい靴履いて満員電車乗って靴が汚れたりするでしょう、それを踏まれたら大喧嘩ですよ。体より靴を守るみたいな。(P 先生)

当時は黒い学生服という学則だったので、男子学生は名古屋まで高速バスで行ってオーダメイドした制服を送ってもらった。関西地方は白い運動靴を履くのが学生の中では定番だったので、女子学生たちがスカートのブリーツにこだわったように、男子学生は靴の汚れに敏感に反応した。こうした男子学生の文化は日本社会に対して「強く見せる」ために広がった。例えば、「三ペン」(三本のペン先が交わるデザインの校章で、全国の朝鮮学校で統一的に用いられている)と呼ばれるバッジを上着に付けていることが朝鮮学校の印となっていた。地域で喧嘩が強いことで知られる朝鮮学校の場合、それを付けていることが「強さ」の象徴にもなりえた⁽¹⁸⁾。その意味で女子学生たちのチマチョゴリ制服ほどではないにしても、朝鮮学校の男子学生にとって校章バッジや帽章などの服装が「民族的な目印 (ethnic marker)」となった。

女性がチマチョゴリ制服の「端整な着こなし」を志向したことに対して、男性は外見で「強い」雰囲気を出すことにこだわっていた。性別に関係なく、朝鮮風の布を制服に用いるような共通の制服文化もあった。教員の生活指導を避けるため、女性であればチマチョゴリの袖に朝鮮風の布や刺繍を足したり、男性は学ランの裏地に刺繍をほどこしたりしていた。このように、朝鮮学校に通う学生たちにとっての制服文化は、ジェンダー役割を反映しつつ、朝鮮人だけの空間である朝鮮学校と、その外側にひろがる日本社会の日常空間を往来するなかで形成されていった。

ここまでの論述を考察しておきたい。女子学生が自律的に着用していたチマチョゴリ制服を「義務」にしたのは、学校による「上」からのジェンダー秩序の形成といえる。教育文化史研究において、学校制服とは「学校における教育の目的や内容についての意識の状況をすぐれて具体的に示すもの」(佐藤編 2005: 70)であると指摘されている。朝鮮学校の存在価値でもある「朝鮮人として生きる」ことを衣装で表したという意味において、チマチョゴリ制服は、まさに「学校における教育の目的や内容についての意

識」を形にしたものである。また、難波（2012: 193）が述べるように、制服に込める意味は学生のみならず、教師、教育行政関係者、保護者、卒業生などの関与によって形成され、かれらの関心や価値観が投影される。歴史的経緯をみると、チマチョゴリ制服も民族教育に関わる人々の合意のなかで、在日本朝鮮人総連合会（以下、総連）の「上」から決められたものである。そこでは、制服を通じて「民族」を表象するのは「当然」なことにされ、朝鮮学校をとりまくコミュニティ全体がそれを共有すると想定された。その容認と同意のなかで、民族的な象徴性を強く帯びた衣装を制服として着用した女子学生も、日本社会の一般的な洋服スタイルの学ランを着用していた男子学生も、ともに「上」から決められた規則によって、ジェンダー秩序の反映された制服をそれぞれが着用していた。

その一方で朝鮮学校の女子学生は、制服を受容しながらも微妙な色合いなど、独自の工夫をこらしていた。女子学生は「上」からの「意思決定」を受け入れつつ、そのなかで独自の意味を付与していった。組織におけるセンス・メイキング（意味付与）の役割や特徴を整理したワイクラ（Weick et al. 2005）によると、行為（Action）と解釈（Interpretation）の相互作用から形成される意味付与は組織の安定に影響を及ぼす。制服を仕立てたり、手入れしたりするような朝鮮学校の学生たちの行為は、ジェンダー役割を内面化するとともに、朝鮮人であることを示しながら、自ら制服に意味を付与した。それはさらに朝鮮学校学生たちの連帯の手段となり、後述する学生自らによる抵抗にもつながっていくことになる。

3. 日本社会のなかでのチマチョゴリ制服

3-1. マスメディアにみる朝鮮学校学生へのヘイトクライム

ここでは日本社会がチマチョゴリ制服に与えた意味を探るため、チマチョゴリ制服の切り裂き事件の発生過程と、当時の社会的背景を照らし合わせる。チマチョゴリ制服の切り裂き事件が急増したのは1990年代であるが、後述するように朝鮮学校の女子学生に対する暴力事件は、このときがはじめてではない。それ以前にもチマチョゴリ姿の女性に対する暴力は、公式に記録されていないが、日常的に起きていた。チマチョゴリを着ているだけで石を投げられたり、暴言を浴びせられたりする経験は、在日朝鮮人女性たちにとって珍しいことではなかった。たとえば、1958年生のYMさんは、小学生の時に自前のチマチョゴリを着て学校に行く途中に石を投げられた経験がある。彼女はそれでもチマチョゴリを着るのを好んでいたと言う⁽¹⁹⁾。

また、衣服をエスニック・マーカーとした暴力事件は女性に限ったことでもなかった。そもそも制服を目印として朝鮮学校の学生を攻撃した最初の記録は、管見のかぎ

り、男子学生を対象にしたものである。1963年、国土館高校生を中心にした私立高校の学生らが朝鮮学校の高校生を対象に「朝高であること」を理由として組織的かつ計画的に、武器まで用いた傷害事件が多発した。このときは主に男子学生が攻撃対象になったが、その際にエスニック・マーカーとなったのは、帽子などにつけていた「三ペン」の徽章、Yシャツの胸のぬいとりなどであった（在日朝鮮中・高級生に対する人権侵犯事件調査団編 1963: 15, 24, 31）。身につけるものだけが目印となっただけではなく、朝鮮語を使ったり、朝鮮語で名前を呼ばれたりすることがマーカーとなって、暴行、暴言、嫌がらせの対象になることもあった⁽²⁰⁾。

そのため、チマチョゴリ制服への嫌がらせがいつ頃から、どのようにあったのかを特定することは容易ではない。ただ、「北朝鮮」や在日朝鮮人に関連した事件が起きる度に朝鮮学校学生を対象にしたヘイトクライムが急増していたことは確かである⁽²¹⁾。チマチョゴリ制服切り裂き事件の流れを明らかにするために、以下では政治的情勢とメディア報道の流れに、朝鮮学校学生を対象にしたヘイトクライムの記録を組み合わせる。その際に『朝日新聞』の記事に焦点をおく⁽²²⁾。マスメディアのなかでも朝鮮学校を取り上げた記事数が最も多いだけでなく⁽²³⁾、日本の政府や社会に対する批判的観点から学校生活や処遇問題などの多様な内容を報じているためである。

マスメディアで朝鮮学校学生を対象にしたヘイトクライム事件が本格的に報じられるようになったのは1994年からであるが、公論化されたのは1989年からである⁽²⁴⁾。図4は1985年から2005年までの各年度に「朝鮮学校」をキーワードにした報道件数を示したものである。『朝日新聞』における朝鮮学校関連の報道件数は1989年から増加しはじめ、1994年、2003年、2010年に急昇する。その特定年度は、2009年12月に起きた在

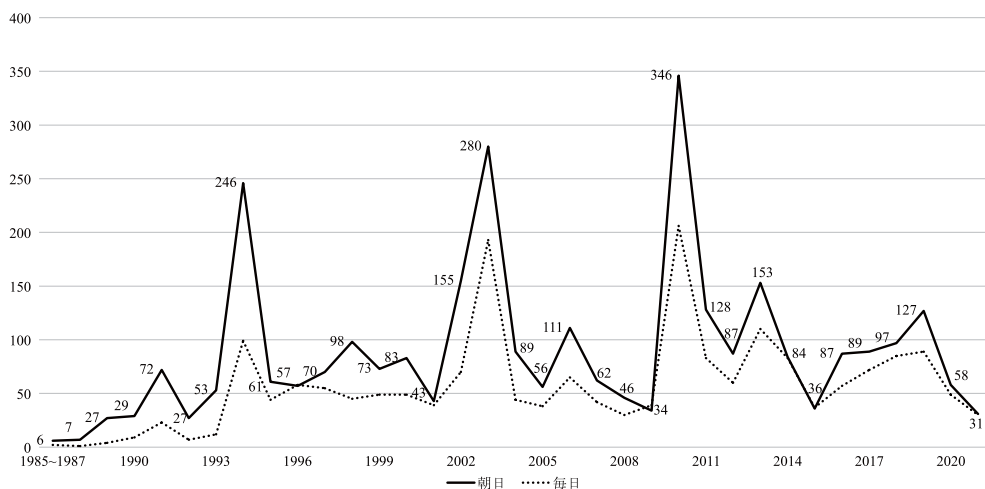


図4 朝鮮学校関連の報道件数

※備考：グラフ上の数字は『朝日新聞』の報道件数を示す。

特会による京都朝鮮初級学校襲撃事件による報道が集中する 2010 年以外、全て総連や「北朝鮮」⁽²⁵⁾に関わる事件が起きた時期である。それは、朝鮮学校の学生を対象にしたヘイトクライムの増加と「北朝鮮」の悪魔化が相関関係にあったことを意味しているが、その一方で、そうした問題を解決しようとする社会運動の動きが活発化していた側面もある。

3-1-(a). 攻撃のはじまり：組織的、計画的なヘイトクライム（1983 年，1987 年）

チマチョゴリ制服姿の女子学生が襲われた最初の事件とされるのは、1983 年 10 月 9 日「ラングーン事件」直後に起きたものである。同年 11 月 24 日、登校時の神奈川朝鮮中高級学校の女子学生が「朝鮮人は日本から出ていけ」と叫ぶ男性に後頭部を殴打された。つづいて 12 月 6 日にも、同校の女子学生が物陰に潜んでいた男性に刃物で大腿部を刺され、重傷を負う事件が起きた（朝鮮時報取材班編 1990: 86-87）。

その後、朝鮮学校の学生を対象にしたヘイトクライムが集中的に起きたのは、1987 年 11 月 29 日の「大韓航空（KAL）機爆破事件」直後である。同年 12 月 1 日に愛知朝鮮中高級学校の女子学生の誘拐未遂事件が発生してから、女子学生が何者かに首を締められる事件が全国的に多発した。胸に朝鮮学校の大きなマークが付いた制服を着ていた小学生までが攻撃された。1987 年 12 月には愛知と東京で女子学生が首をヒモで絞められ、神戸でも女子学生が尾行され、両ほおをなぐられるなど、全国各地で朝鮮学校の学生を対象にした事件が相次いだ（朝鮮時報取材班編 1990: 88-92）。

ところが、この時期、一般のマスメディアによる報道は『朝日新聞』が 7 件、『毎日新聞』も事件に関する総連の申入行動を報じた 2 件のみだった⁽²⁶⁾。そのなかで 1987 年 12 月 28 日の『朝日新聞』の記事では朝鮮学校学生の被害事実が比較的詳しく報じられていた。「車内、駅、バス停で朝鮮学校の制服を着ている男女学生が、胸ぐらをつかまれたり、なぐられたり、脅されたりした事件」が各地で起きたが、「警察に知らせたり、かばったりする人はいなかったようだ」と伝える。被害届けを出さない理由に、警察に対する不信があった。ある母親はかつて警察に盗難届けを出しに行ったところ、夫や子どもと姓が異なることを知らない警官から「二号扱いされた」ことから、警察への不信感を抱いていたと言う。そのため学校が被害届を出さずに再発防止を警察に訴えるだけというケースや、被害者の学生が警察への供述をしぶって捜査が進まなかったケースがあった。1988 年 3 月には独自の真相調査団が結成され、街頭宣伝や日本学校の関係者による協議などが各地域で行われた（『朝鮮時報』1988 年 3 月 28 日）。

この時期のヘイトクライムの特徴は、主に成人男性によって尾行されたり、首をヒモで絞めるような類似した犯行手法からみて、右翼と推定される男性によって組織的かつ計画的に行われたことだと言える。社会的な「北朝鮮」関連の騒動がきっかけになり、被害者が女子学生や小学生にまで広がっていき、人権問題として喚起されはじめたとみ

られる。

3-1-(b). 日常化するヘイトクライム：加害者の類型拡大と被害場所の顕在化（1989年）

朝鮮学校の学生の被害が多く報道されるようになった起点は、「パチンコ疑惑」が取り沙汰された1989年である。この年、『週刊文春』に、社会党とパチンコ業界との「癒着関係」を問題視するいわゆる「パチンコ疑惑」関連記事が連載された。これは自民党もパチンコ業界から献金されていたという疑いへと拡大し、社会党と自民党の政治闘争へと展開していった⁽²⁷⁾。その際に、パチンコ業界に総連が関わっていることが政争の具となった。総連との関係について関連議員や『週刊文春』記者の喚問が国会へ要求され、1989年10月20日に行われた国会予算委員会の審議では、公安調査庁が総連の「危険性」と「北朝鮮」との関係について言及した⁽²⁸⁾。

同時期に、朝鮮学校の学生を対象にしたヘイトクライムが急増した。1989年の『朝日新聞』の朝鮮学校に関わる記事27件のうち、14件が朝鮮学校の学生を対象にした嫌がらせに関する記事であった。たとえば同年10月18日には、北海道朝鮮初中高級学校中級部の男子学生2人がバスの運転手から暴言を浴びせられた（朝鮮時報取材班編 1990: 60）。この事件を筆頭として、1989年11月27日現在73件のヘイトクライムが総連による調査の記録として残っている（朝鮮時報取材班編 1990: 60-66）。京都でも女子学生を対象にした2件の事件記録があった。とりわけ、11月13日京都駅の地下道で起きた50代の女性による暴言被害は『朝日新聞』にも報じられた。

11月中旬、〔京都朝鮮中高級学校高級部1年の女子学生〕5人は下校中、JR 京都駅地下街にさしかかった。いつものようにチマチョゴリを着ていた。バスを待つ間に、化粧品などを売っている店に入った。店の奥で50歳ぐらいの女性が突然叫んだ。「お前、朝鮮人だろう」。まったく知らない人だった。5人は無視して通り過ぎようとしたところ、彼女はにらみ続け、「近くに寄るな」、「ニンニク」などと暴言を執ように浴びせた。近くにいた客は「何事か」といった顔で見ていたが、何もいわなかった。（『朝日新聞』1989年12月7日大阪夕刊）

それまでの事件が右翼と推定される男性によって人通りもまばらな場所で計画的に行われたのに対し、上記の京都事件は50代の女性によりひと目の多い場所で突発的に起きた。さらに、チマチョゴリ制服を着る学生が主に標的になったのも特徴であった（朝鮮時報取材班編 1990: 52-53）。そのため、1989年11月26日に「東京朝鮮学校母親の会」（都内23区内10校に通う約4,000人の母親の会）が集会を開き、事件再発防止措置と差別政策の改善を求める要請書を採択、1989年12月1日都知事に申し入れた⁽²⁹⁾。当時、この問題について発信していたのは主に朝鮮学校側であった。

日本国内の政争問題だった「パチンコ疑惑」では、「北朝鮮」や総連が関与したことが注目をされ、問題の本質がないがしろにされた。「北朝鮮フォビア」⁽³⁰⁾とも言うべきものが起きると同時に、日本の政治に外国人が介入したことが「危機」とされた。言う

までもなく、朝鮮学校はこうした「疑惑」には無関係であるにもかかわらず、そうした問題の象徴として攻撃対象となっていた。このように日常化される理不尽な暴力と、それが放置されていることが懸念されるようになるとともに、この時期からメディアは朝鮮学校の処遇問題にも目を向けはじめ、そうしたなかでヘイトクライムが記事化されるようになる。

3-1-(c). チマチョゴリ制服に対する2つの視座：朝鮮学校処遇改善運動（1991年～）と「北朝鮮」悪魔化（1994年）

1991年になると『朝日新聞』で朝鮮学校を取り扱った記事数が72件に増加する。朝鮮学校処遇改善のための運動がその背景にある。1991年からはJR通学定期券問題⁽³¹⁾と高体連問題⁽³²⁾に関連記事が集中しており、問題に決着がつく1993年まで続けられる。朝鮮学校の学生に対する不当性が日本社会に知らされ、それまで朝鮮学校が日本社会との関係のなかで抱えていた問題が水面に浮上する。

とりわけ1994年には朝鮮学校に言及する記事が246件に急増する。「北朝鮮」の「核疑惑」が膨らみ、再び朝鮮学校に「北朝鮮」を投影したためである⁽³³⁾。朝鮮人学生に対する人権侵害調査委員会（1994: 14）によると、1994年7月16日現在、朝鮮学校学生暴行・暴言事件が155件にいたる。朝鮮学校学生を対象にしたヘイトクライムが集中した1994年4月から7月は「北朝鮮」とアメリカの間で核兵器をめぐる緊張が最も高まった時期だった（姜徹 2002: 34）。『朝日新聞』で「北朝鮮」と「核」を取り上げた記事は1994年だけで1,797件にのぼるが、そのうち1,037件が4月から7月に集中していた。「核疑惑」に対する「北朝鮮」への不安は、再び朝鮮学校の学生らに向かった。1994年に起こったヘイトクライムの嵐は、1994年4月14日に東京で高2の女子学生のチマチョゴリ制服が切り裂かれる被害からはじまる。

ミカさん（仮名）はこの朝、東京都調布市の自宅を出て、電車の中で若い男につきまとわれた。ある駅に着いた時、「朝鮮人め」という罵声とともに、頭をこづかれてホームに押し出された。何か後ろで「ブチブチ」と切れる音がしたようだったが、怖くて振り向けなかったという。次の電車に乗り、新宿駅で気づくまでに約15分あった。ミカさんは、穴の開いたチマチョゴリを前にたぐり寄せ、その上をかばんで押さえて、学校の門をくぐった。同級生の顔を見ると、こらえ切れなくなった。涙は1時間以上とまらなかった。（『朝日新聞』1994年6月9日朝刊）

チマチョゴリを切り裂いた犯人は23歳の男性だった。付き添っていた教員が犯人を見つけ、警視庁成城署に「器物損壊容疑」で逮捕された。朝鮮人学生に対する人権侵害調査委員会（1994: 15-20）による4月14日から6月18日までの調査記録のなかで、チマチョゴリ制服が実際に切り裂かれたり、汚されたりする事件は45件のうち7件で、そのほとんどは東京で起きていた。京都でも5月14日に中2の女子学生が30代の男性

によって後ろから突き倒されてすり傷を負った事件からはじまり、バスで中年女性に髪を引っ張られたり、暴言を浴びたりするような事件が4件記されている。

学生が危険にさらされながら登校を続けるなか、保護者の不安は高まった。毎朝、母親たちは子どもたちの見守り続けた（富沢 1994）。同年6月には埼玉で保護者代表が集めた朝鮮学校処遇改善を求める約11万人の署名を提出し（『朝日新聞』6月9日埼玉朝刊）、京都では「民族学校の処遇改善を求める京都学父母連絡協議会」が結成されるなど（『朝日新聞』1994年6月10日京都朝刊）、さまざまな運動が全国各地で展開された。同時に、朝鮮学校の処遇改善のための記事も1994年が突出して多かった。朝鮮学校をめぐる問題が大きくなるとともに、朝鮮学校への差別をやめようという動きが活発になったのである。とくに1994年報道された朝鮮学校関連の記事246件のうち102件がチマチョゴリというワードを内容に含んでいた。すなわち、朝鮮学校の差別を訴える時に、その象徴として「チマチョゴリ制服」が語られるようになったといえる。

こうしたヘイトクライムが一段落した後もマスメディアは朝鮮学校の処遇問題に目を逸らさず取りあげ続けた。JR通学定期券問題と高体連問題が解決された後の1995年からは、朝鮮学校学生の大学受験資格不認可問題が浮上した。徐々に朝鮮学校学生の受験資格を認定する大学が増え、2003年には関連報道が199件に至るほど朝鮮学校卒業生の受験問題が社会運動として取り上げられた。同時に朝鮮学校の生活に関わる特集や在日朝鮮人個人のライフヒストリーを紹介する記事が組まれるようになった。

このように、1994年前後は朝鮮学校に対する関心が高まると同時に、朝鮮学校学生を対象にしたヘイトクライムも多く報じられた。こうした変化は、朝鮮学校に関わる社会運動が、日本社会へと広がっていったためでもある。以前からも朝鮮学校学生を対象にしたヘイトクライムがある度に朝鮮学校側は声をあげてきたが、日本社会で問題の深刻さが共有され、全国的に差別反対声明を出す団体が増えたのは1994年のことである。もっとも、朝鮮学校をとりまく問題が社会運動を通じて解決していく裏で、学生が直面する被害やそのような差別を傍観する人々が依然として多かったことは言うまでもない。

3-1-(d)．終わらない攻撃：第二制服の登場（1998年）

朝鮮学校処遇改善運動がすすめられるなかで、再びチマチョゴリ制服が攻撃の対象になる。1998年5月からの新聞報道は「北朝鮮」の「ミサイル」に向かっていった。1998年5月、アメリカは「北朝鮮」の「ミサイル輸出」の疑惑を提起し、米軍を攻撃する可能性が高いと思われるイランやパキスタンなどと手を結び、世界平和を脅かす存在として「北朝鮮」に注目が集まった⁽³⁴⁾。同年7月23日にミサイル「ノドン」の発射実験が行われ（『朝日新聞』1998年7月24日朝刊）、8月31日にはロシアのウラジオストク南方の日本海に向けて「テポドン」が発射された（『朝日新聞』1998年9月1日朝刊）。

「北朝鮮」は「人工衛星」と表明したが、防衛庁は日本の安全保障を脅かす「弾道ミサイル」と最終報告した（『朝日新聞』1998年10月30日夕刊）。1998年、「北朝鮮」に関する記事2,001件のうち535件が9月に集中している⁽³⁵⁾。「テポドン」の正体に世論が騒いでいるなか、「北朝鮮」に対する怒りはまたしても朝鮮学校に向かった。

「テポドン」が発射された8月31日直後から、チマチョゴリ制服の学生を標的に「ミサイルを撃ち込んでやる」、「朝鮮人なんかいいやないやない」などと暴言を吐く事件が全国で40件以上報告された（『毎日新聞』1999年6月18日朝刊）。1998年11月5日には、東京で高1の女子学生が20代とみられる男性から「お前朝鮮人か」と言われて突然ナイフを振り回され、手を切られる事件が起きた（『朝日新聞』1998年11月10日東京朝刊）。1999年に入り、事件がおさまったかと思いきや、再び3月2日に中3の女子学生が横浜の路上でカッターナイフを持った若い男に追いかけられる事件が発生した（『朝日新聞』1999年3月6日朝刊）。

これらを受けて最終的に総連は、1998年11月11日開催された中央大会で第二制服を採択し（呉 2015: 199-202）、1999年から通学用の第二制服を導入した。朝鮮総連教育局は1999年3月5日までに、全国61校の中高級学校に通達「女子生徒の制服に関する規定の一部改正について」を出し、第二制服を導入した。しかし、そうになると新たに制服をデザインして発注することになる。教職員間の討議や保護者への説明が必要になり、保護者からの反対も予想されたため、一時的に「制服自由化」を進める学校もあった（『朝日新聞』1999年3月6日朝刊）。6月になっても東京朝鮮中高級学校の女子学生のうち、ブラウスでの通学に変えたのは3分の1に過ぎなかった（『毎日新聞』1999年6月18日朝刊）。それほど第二制服に対して少なからず抵抗があったと見られる。

その後、チマチョゴリ制服が直接攻撃される事件は、少なくとも報道では見出せなくなる。しかし、1999年7月6日に茨城県で、登校中の小学6年生を高校生と推定される男性3人が呼び止め、「なに人か」という質問に「朝鮮人です」と答えると、カバンとシャツを数カ所切りつけられた事件が発生した（『朝日新聞』1999年8月7日夕刊）。2000年「北朝鮮」を中間ルートにした「覚醒剤流入事件」が発生した時にも朝鮮学校の学生を攻撃するヘイトクライムは続き、2002年日本人拉致事実を認めた日朝会談の後は更に深刻な様相を呈する⁽³⁶⁾。

上述のとおり、日本のマスメディアにおける「北朝鮮」のイメージは朝鮮学校にそのまま投影されてきた。1991年1月からはじまった日朝会談への期待は友好的な雰囲気をもたらしてはいたが、米朝関係も影響して、1990年代半ば頃からは厳しい経済状況や平和を脅かす存在としての「北朝鮮」が表象され、朝鮮学校があたかもその一部かのように見られるようになった。朝鮮学校の学生であることがすぐ分かるチマチョゴリ制服は、レイシストたちにとって分かりやすい標的となった。路上でのチマチョゴリ制服

は、日本社会において「差別」の対象としての意味が付与されたのである。

3-2. チマチョゴリに対して日本社会が付与する意味

日本社会はチマチョゴリ制服にどのような意味を付与したのか。加害者側は暴力を加える対象を識別するための標識としてチマチョゴリ制服を捉え、運動体側では被差別の象徴としてチマチョゴリ制服を前面に出した。朝鮮学校の学生にとって、自らのエイジェンシーを表す制服が、日本社会では「(被)差別」の象徴として知れわたるようになった。

「怒りは、なにものにも守られることなく目立っている者に向けられる⁽³⁷⁾」というアドルノとホルクハイマーの言葉は、チマチョゴリ制服に向かう暴力の背景をよく表している。悪魔化された「北朝鮮」と総連が朝鮮学校へと投影され、学生への暴力行為として発現し、学生の被害を疑う言説をも生み出した。たとえば、西岡（1997: 37-49）は、被害者側が警察に届けないことに疑問を抱いた⁽³⁸⁾。社会党が首相なのだから被害者側の日本の警察への不信用は問題ないはずだ、などと述べる。さらに、ヘイトクライムを防ぐためには、総連のタブーを解くのが優先であると、矛先を総連へと向けた。しかしながら、『朝日新聞』の記事をみるだけでも、事件が起きる度に「北朝鮮」や総連が立場を表明してきたことが分かる⁽³⁹⁾。すべての事件で被害届けを出せなかった理由も、警察側が積極的に捜査しようとせず（『朝日新聞』1987年12月28日朝刊）、容疑者も被害者側が見つけなければならない（『朝日新聞』1994年6月9日朝刊）など、マイノリティが被害者になった事件の捜査に消極的な日本社会のあり方が背景となっていた⁽⁴⁰⁾。憎しみは、誤った投影にもとづいて「犠牲者のうちに迫害者の姿を見出し、それに対して自分たちは、せっぱつまってやむなく正当防衛に立ち上らざるをえないと考える」人々によって具現化される（Horkheimer and Adorno 1947=2007: 387）。加害者側は「自分」を侵害する存在として「北朝鮮」や総連を「公共の敵」という枠組みに捉え、その中に朝鮮学校の学生を当てはめ、かれらに対する憎しみや暴力行為を正当化した。

さらに、加害者にとってチマチョゴリ制服は、朝鮮学校の学生の印であると同時に、若い女性であることのマーカーともなっていた。ヘイトクライムが拡大した背景には、チマチョゴリ制服を着たのが若年の女子学生であったことも影響している。エムケ（Emcke 2016=2018: 63）は、憎しみには人種主義的、性差別的妄想が入り乱れるため、その現象のテキストと画像を使って検証し、考察する必要があると指摘する。朝鮮学校の学生に向けられたヘイトスピーチの内容をみると、女子学生に向かって「変な服を着ている」、「これが噂のチマチョゴリか気持ち悪い」のように（朝鮮人学生に対する人権侵害調査委員会 1994: 16-17）、チマチョゴリ制服を「異常なもの」としてイメージ化

した言葉が数多く見られる。朝鮮学校にかかってきた脅迫電話のなかには「チマチョゴリを着ている女子中学生を拉致して全裸で荒川の土手に放置する」といった内容もあった（『朝日新聞』1998年9月10日東京朝刊）。チマチョゴリ制服を着る学生を対象にしたこれらの暴言や暴力は、レイシズムと同時にミソジニーにもとづいている。

ヘイトクライムの加害者によって「敵」の象徴とされたチマチョゴリ制服は、既に述べたように、それに対抗する運動体側においても「被差別」の象徴となった。日本の支援者、在日朝鮮人の支援者、朝鮮学校関係者、保護者などがヘイトクライムの阻止を日本社会に呼びかけた⁽⁴¹⁾。報道でも、被害をうけた学生の「私は日本生まれの4世だけれど、朝鮮の血が流れている。その民族衣装は、私たちの誇り。悪いことをしたわけでもない。なぜ、脱がなければいけないの」（『朝日新聞』1994年6月9日朝刊）という語りが報じられる。相続く暴力のなかで、被害者側が矢面に立って訴えなければならない状況になっていた。

民族的ないし人種的マイノリティに対するヘイトクライムは、その根底にあるレイシズムが犯行動機として注目され、そこにしばしば複合的に作用していたミソジニーの問題は相対的に看過されやすかった。マイノリティ女性を対象にした犯罪には民族とジェンダーが交差しており、女性とレイシズムを別個に考えることは、一方の分析が他方の妥当性を否定しかねない厄介な政治的帰結を生み出しかねない（Crenshaw 1991）。もちろん、既に述べたように、朝鮮学校学生を対象にしたヘイトクライムは、必ずしも女性のみをターゲットにしたわけではなく、男性もターゲットとなってきた歴史があるし、学校を総体として排除する制度も存在しているため、これをレイシズムの問題として位置づけることは必要不可欠である。しかし、チマチョゴリ制服を標識にしたことには「朝鮮人であり、女性であること」が反映されており、それが服を切り裂くなどの方法や投げかけられることばの特性をつくりだしていた。

この深刻な事態への対処が重要視されるなかで、学生たちのエイジェンシーはこれまで必ずしも見えてこなかった。次章では、その点に注目したい。

4. 「負けない」表象としてのチマチョゴリ制服

4-1. 京都朝鮮中高級学校女子学生たちの闘い

ここでは京都の朝鮮学校に1960年代後半から1990年代前半までの22年間在職したS先生と、その時期に朝鮮学校に通った女性たちに注目する。S先生は退職した後も民族教育のために運動に務めるが、公的な場で常にチマチョゴリを着用することで有名である。そのきっかけになったのが、チマチョゴリ制服をめぐる学生たちの抵抗であった。

1987年11月29日の「大韓航空機爆破事件」直後から1988年2月まで朝鮮学校の学生を対象にした事件は48件に及び、朝鮮学校の女子学生に対する事件が全国的に相次いだ（『朝日新聞』1988年4月26日夕刊）。京都では1987年12月8日、中学1年の女子学生が下校時に中年の男性から「朝鮮人は朝鮮に帰れ」と引きずりまわされ胸を突きとばされた事件が発生した（林 1990: 207）。学校側は朝鮮学校の学生であることが目立つチマチョゴリ制服着用を控える対策を立てねばならなかった。ところが、それに反対したのは被害のターゲットとなりうる女子学生だった。その一例として京都朝鮮中高級学校の事例を紹介したい⁽⁴²⁾。

「ラングーン事件」に続き、再びチマチョゴリ制服を着る学生を対象にした事件が全国で多発したため、学校側は緊急処置として「翌日から学校に来る時には、チマチョゴリ制服の代わりに私服または体操服を着てくるように」と指示した。それを伝えるために、女子教員全員とともに中学校1年生から高校3年生までの女子学生が講堂に集められた。当時この指示を伝達する役割を担ったS先生は、次のように回想する。

〔朝鮮学校学生を対象に〕暴力ふるったりすることがあっちこっちで起こってるので、「皆さんの命を守るために、明日からはもう私服か体操服で登校するように」という話をしたわけですよ。その最後、私まだ最後まで言ってないのに、生徒会の何人かを中心に、十何人かの女の子がいきなり立ち上がってね、もう泣きながら怒るわけですよ。「何で、私たちがチマチョゴリ着たらいけないんですか。何か悪いことしたんですか」って。「日本の人たちにそれで何か迷惑かけたんですか」と怒ってね。私に抗議をしてくるわけですよ。言われても、私も苦しい気持ちで言ってるし、子どもの涙見たらたまらなくなっ一緒に泣いちゃったんですけど。他の先生たちもみんな泣いてて。（S先生）

苦渋の思いでチマチョゴリ制服での登校中止を伝えたところ、女子学生から強く抗議され、結局、そのまま解散したと言う。しかし、驚いたことに翌日、女子学生たち全員がチマチョゴリ制服を着て登校した。

次の日に毎朝校門に立ってたんですけど、みんな私服か、体操服でも着てくるのかなと思ったら本当に1人残らず皆チマチョゴリで来るんですね。その時、ちょっと涼しい時でもあったんで、普段は軽くカーディガンとか羽織ってる子もいたんですけど、その日に限って、みんなチマチョゴリだけで来るわけですよ。で、怒るわけにもいけないし、子どもたちの誇らしげな顔見てらね、私も嬉しくてね、また泣いてしまいました。それほど、子どもたちにとってチマチョゴリって大事なものであったんですよ。（S先生）

チマチョゴリの着用をやめようと伝えた翌朝、S先生の予想とは違って、むしろ学生たちはいつもよりきちんとした格好で登校した。ふだんは禁止されているカーディガンを羽織ってくる学生ですら、あえてカーディガンを脱いだできたということであるから、

女子学生たちの強い抵抗の意思が伺える。このときに女子学生だった GS さん（1984-90 年在学）は次のように語る。

大韓航空機事件があったんですよ。その時に、学校にいっぱい嫌がらせの電話とか、剃刀の入ったなんかがきたとか、すごい問題になって。全校生徒の女の子が集められて、講堂に。S 先生が前で「チョゴリを廃止します」って言われたんですよ。みんな泣いて、喧嘩して「先生、絶対脱がへん」って言って。結局守って、そのときは。そのときは、ちょっと不良じゃないけど〔校則に従わない〕先輩とかいたんですけど、そういう人たちは着たらあかんっていう上のカーディガンとか着てた人たちも次の日から脱いで、わざわざこれ見よがしに「チョゴリ着てますよ」っていうアピールをする、そういう根性があったよね。先生に言われても「絶対これは脱がへん」っていう。（GS さん）

S 先生は毎朝校門前で、ジャージ姿で厳しく生活指導をすることで有名な先生だった。そうした先生の指示にあえて逆らい、チマチョゴリ制服を着て学校に来るのには、怒られる覚悟が伴う行動であった。日本社会の暴力をともなった圧力に屈したくないという意志を、普段よりもしっかりと制服を着用することで示したのである。額面どおりに捉えれば、これは教員に対する「反抗」だが、S 先生はそのことを「嬉し」かったと語る。

そのときのその子どもたちが私に向かって抗議をしてたんですけど、そうじゃないですよ。持って行き場がない、そういう気持ちだったと思うんです。本当にね、今でもそれを、そのときのこと考えるとね、大人としてね、この子たちを守ってあげずにそんな話をしなきゃならない自分自身が情けなかったんですね。（S 先生）

学生たちの「反抗」は、かたちとしては学校の教員に向かっていたが、矛先はヘイトクライムを生み出す日本社会の理不尽さに向かっていたと考えられる。チマチョゴリ制服がヘイトクライムの対象となるのは、それを攻撃する側にこそ問題があるのであって、着ている側の問題ではない。そうにもかかわらず、自分たちがチマチョゴリ制服をやめるというのは、問題を内部化してしまう。学生たちの抵抗は、問題の所在が日本社会の側にあるのに、あたかも朝鮮学校側にあるかのように作用する理不尽な権力に向けられていたと言ってよい。さらにいえば、それは「朝鮮人であること」を表明しながら生きようとする自分を否定されることに対する抵抗であった。

チマチョゴリ制服切り裂き事件について、徐京植は「朝鮮人の民族的権利の問題であり、すべてのマイノリティの文化的権利の問題」であり、「すべての朝鮮人が、あらゆる形で朝鮮人を表明して生きる。それが彼女らへの連帯になる」と述べる（朝日新聞 1999 年 3 月 6 日朝刊）。学生たちを守るためとはいえ、こうした権利を擁護することよりも、朝鮮学校の象徴を不可視化して切り抜けるという方策を提示したことに対して、

S 先生も内心忸怩たるものを覚えていた。だからこそ、学生たちの「反抗」を嬉しく思ったのだが、それだけではなく、こうした権利が確保されない社会への責任とともに、学生側の思いに応えられなかったことへの痛みが S 先生のなかに刻まれた。退職した後も S 先生が民族教育の権利確保運動に関わり、公的な場で常にチマチョゴリの姿で立つ理由もそこにある。

チマチョゴリ制服を着続けるための学生たちの抗議は、制服に象徴されることを損なう日本社会に対する怒りとともに、制服の着用を決める総連コミュニティの「上」に対する自律性の表明でもあった。したがって、チマチョゴリ制服を着続けようとした抗議はチマチョゴリ制服の「着用を決める主体は自分たちである」ことを明確に表した実践でもある。1987 年にチマチョゴリ制服の着用に危険視されて以来、1999 年に第二制服が正式に採択されるまで 10 年以上かかった一つの背景には、こうした女子学生ら当事者や関係者たちの抵抗があったと思われる。

4-2. 第二制服の登場

京都において第二制服が登場するまでの過程を、MC さんの経験から探ってみる⁽⁴³⁾。MC さんは 1990 年から 1996 年まで京都朝鮮中高級学校に通い、朝鮮大学校に進学して卒業したあと京都に戻り、教員として 4 年間在籍した。朝鮮学校に通っていた時期にはチマチョゴリ制服を着ており、教員になってからは第二制服採用にいたる過渡期の状況をみてきた。MC さんは、学生時代に暴言を吐かれたこと経験があるほか、部活の部屋にかけていた先輩のチマチョゴリ制服が切り裂さかれたことも鮮明に記憶していた。

本当に切られる事件があった時代。私もね、1 回暴言吐かれた事があって、バスで行ってるときに。高校の時、バレーボール部が合宿に行ってん。もう学校からであったから、みんなチョゴリで登校して部室に〔チマチョゴリ制服を〕かけといて。最終日に学校に荷物取りに行くのに学校に帰ってきたら、多分鍵がちゃんとかかってなくて、かけてたチョゴリがめっちゃ切られてて。1 つ上の先輩がめっちゃ泣いたの覚えてる。(MC さん)

チマチョゴリ制服を着て通学する時にヘイトクライムに遭遇する経験は、朝鮮学校的女子学生にとっては珍しいことではなかった。このような状況が続けられるなかで、学生の安全を最優先に考えるべきか、それでも負けずに民族差別に対抗すべきかという議論が起こった。前者は日本社会向けに「民族」の象徴を消し去ることになり、後者を選択した場合、攻撃の矢面に女子学生を立たせるような格好になってしまう。それでよいのかという問題が提起されることになった。

結局「テポドン発射」後に相次いだヘイトクライムがきっかけになり、本格的にチマチョゴリ制服存続について現実的な決断をする必要がせまってきた。その頃、MC さん

は京都朝鮮中高級学校の中級部の新任教員として赴任した。

自分が中学の先生をしている時に、チョゴリの登校から制服の登校に切り替わって。家庭訪問に行って父兄たちに意見を聞きに行った記憶がある。多分、私が学校に行ったときすぐじゃなくて、もう何年か前からそういう制服に切り替えるっていうことは学校の中であつたと思うんだけど。本当に切り替えようってなった時にすごく印象に残っているのが「この時代に民族をすごく主張する必要があるのか」という意見があつて、「自分たちの中に持ってたらいいいんじゃないか」って言う。「時代が変わってきてるから、もう何があるかわからない。人と違うものを着てるだけで指を指される時代やから、それを捨てろって言ってる訳じゃない」って言う意見も多くて。やっぱり時代のニーズっていうのが大きかったのかなって。〔中略〕なんか、その変えるときに自分はチョゴリを着るのが当たり前だったから子どもたちがチョゴリを着ないなんてって思ってたんやけど、なんかすごい寂しい感じで。(MCさん)

通学用制服の導入を直前にして、MCさんは家庭訪問時に制服に対する保護者の意見を聞いてきた。当時のMCさんはチマチョゴリ制服以外のものは考えたことがなかったので、保護者の考えの変化に驚いた。加害者の階層や犯行内容の範囲が広がっていく日本社会の「時代の変化」が理由としてあげられた。学生の安全のためには十分理解するものの、頭と心が追いつかない「寂しさ」を語る卒業生は少なくない。KHさんも「ハッキョで着替えるんですけど、そう話聞いた時、最初すごくショックやったんですね」と語っていた。

通学用の第二制服を最終的に決定したのは、今回も総連コミュニティの「上」であつた。それは朝鮮学校だけの問題ではなく、「制服」をめぐる組織内の権力関係やジェンダー規範から考えなければならぬ問題である。そこに学校の外部でチマチョゴリ制服が攻撃の標的になるレイシズム問題が交差していた。

4-3. 継承される〈生きる方法〉としてのチマチョゴリ制服

朝鮮学校の女子学生たちは、なぜチマチョゴリ制服を着続けようとしたのか。朝鮮学校の女子学生たちはチマチョゴリ制服自体に「プライド」を持ち、着用することが「負けない」ことだと表すことが多い。ここでは、その2つの表現の意味を考えよう。

「プライド」という意味を理解するためには、通学路でチマチョゴリ制服を着用する時とその後の変化を比べてみると分かりやすい。1980-90年代に学生としてチマチョゴリ制服を着て通学していた母親たちは、インタビュー当時、子どもを朝鮮学校に通わせていた。第二制服で登校して学校でチマチョゴリ制服に着替える娘たちの姿から以前とは違った変化を感じると言う。

SH さん：でも今の子らそんな執着感まったくない。こだわりがなさすぎて。

GS さん：通学に着ないから。

RK さん：あの頃は本当チョゴリ着て外を歩いているっていうプライド [があった]。

——それ、当時はどうですか。言われたりとか。

RK さん：あります。でもそのときはそれ以上に返すくらいのあれが。

MA さん：根性があったというか、「負けてへんで」みたいな。

現在の学生の制服に対する思いが変わったわけではないが、自分の経験に比べると制服の手入れを昔ほど気にしなくなったと言う。その理由について、もはや「外」ではチマチョゴリ制服を着なくなり、着用の方が「内」に限られるようになったからだとしている。すなわちチマチョゴリ制服を「整える」ということは、「外部」の他者によってアイデンティファイされた時に、自らのアイデンティティに一層自信をもつための実践であった。それが彼女たちの「プライド」になってきた。

次に、RA さんと MA さんが言う「それ以上返す」や「負けてへんで」という言葉を見ていきたい。朝鮮学校の女子学生たちがチマチョゴリ制服に付与したもう一つの意味は「負けない」ということである。暴言や暴力にさらされてもチマチョゴリ制服を着続けようとした理由に「負けない」精神がある。WM さん（1981-87 年在学）は、「負けない」という強い意志でチマチョゴリ制服を着続けてきたと語る⁽⁴⁴⁾。

通学は常にチマチョゴリで。私たちがね、在学中もそんなことたくさんあったんですけど、自分たちが身にまとうものというのはすごくこだわりがあって。親たちも「何のためにチョゴリを脱がなあかんのか」という気持ちがあって。ただ、今はあんまりにも危険なことが多すぎて。昔はもうそう言いながらも「それでもやっぱり闘うぞ」という、「負けないぞ」という気持ちが強く。意地悪されればされるほど、チョゴリを着てて、もちろんハサミで切られる子もいれば、それを引っ張られる子もいたんですけど、でも「やられればやられるほど、負けないぞ」という気持ちが強く。（WM さん）

制服を着て通学することで、朝鮮学校の学生であることが分かり、暴言を浴びることもあったとしても、チマチョゴリ制服を堂々と着続ける意志を持っていた。こうして彼女たちにとって通学時にチマチョゴリ制服を着る意味が大きくなっていった。ここでおそらく「負けない」は「負ける」の対義語ではあっても、「勝ちたい」の同義語ではない。つまり「負けない」は勝ち負けの問題ではなく、在日朝鮮人のアイデンティティを否定しようとする力への抵抗を意味する。自らサブカルチャー化してきたチマチョゴリ制服が、同化と服従の圧力に抗うための非言語的な手段になったのである。「負けない」という意味が付与されたチマチョゴリ制服を通して学生たちが連帯しはじめたのである。

こうした「負けない」精神は、チマチョゴリ制服が切り裂かれることでいきなり形成されたものではなく、日本社会で生き抜くために継承されてきたものである。在日朝鮮

人3世のWMさんは、2世の母親が持っていた「負けない」精神を、チマチョゴリ制服を通じて継承してきた自分たちが、4世の子どもたちに継承しようとする時に直面する厳しさを次のように話す。

今は本当にややこしい人がたくさんいるのと、やっぱり安全を第一に考えようということ。自分が親になってみて、やっぱり〔自分の親世代である〕2世が強かった、「負けないぞ」という精神がすごくあって。3世、私とかになってくると、オモニ〔母〕たちから受け継いだ「負けないぞ」という精神もあれば、やっぱり「子どもを安全に、何かあればどうしよう」という心配が先立って、昔のように強くチョゴリを着て行きなさいという〔のができない〕。子どもがね「芸術競演があるからチョゴリ着て行かなあかんけど、制服着替えなあかんかな、チョゴリでバス乗ったらダメ？」と聞かれると「やめといて」って言うってしまう。「やっぱりね、何があるか分からないから、できればチョゴリでは行かずに、ジャージとかで行って着替えなさい」と。でも「荷物多くなるけど」って言われながら「それでも安全を考えてそうして」って言うってしまう自分がいる。(WMさん)

1980-90年代にチマチョゴリ制服を着用して闘ってきた女子学生たちは在日朝鮮人3世である。彼女たちの親世代の在日朝鮮人2世は、戦後日本で国籍条項をはじめとした差別をもらに受けてきた世代である。民族学校に通いたくても通えなかった人、通っていても「朝鮮人学校閉鎖令」で学校に行けなくなったり、その余波をうけてきた人、学校を卒業しても就職できない人、そうしたことに向き合いながら生きてきた2世たちの「負けない精神」を、その子どもでもある3世が受け継いだ。その精神がかたちになったのがチマチョゴリ制服である。〈支配のマトリックス〉(matrix of domination)⁽⁴⁵⁾のなかでの黒人女性のエイジェンシーを論じたコリンズは、抑圧的な状況に抵抗できるように女性どうしが助け合うこと、それを母から娘に受け継いできたことが黒人女性の力になってきたと指摘する(Collins 2009: 107-115)。交差性の上におかれている女性たちは、生きるために力を合わせ、その〈生きる方法〉を次々に受け継いでいく。朝鮮学校をとりまく女性たちにとってのチマチョゴリ制服は、自ら形成し受け継いでいく文化の一つであり、抵抗するための手段となってきたのである。

黒人女性たちが声を出す表現手段としては、ブルースのような音楽や詩などの文学があった(Collins 2009: 115-120)。そうした言語的手段は、在日朝鮮人女性の文学にも確かに存在した⁽⁴⁶⁾。しかし、文学で自己表現できた在日朝鮮人女性はそれほど多くない。それに対してチマチョゴリ制服は、非言語的手段として、日常的な「衣」生活に直結するかたちで受け継がれてきた。家父長制支配を維持するために、女性は伝統的な衣服や受容可能な西洋衣服を押し付けられてきたが、それを受容したり、拒否しながら自分の自由意志を示してきた(Ross 2008=2016: 292)。さらに、対抗する力を持たない女性たちは、多くの場合、自己表現の手段として非言語的象徴を用いた(Crane 2000: 100)。

たとえば、ムスリム女性の象徴であるヴェールは、そうした非言語的手段の一つである。インドネシアでは政治運動や家父長制への抵抗の手段として、個々人が色や形、大きさに変化を与えながら自発的に行動した（野中 2015）。人目につきやすいチマチョゴリも、彼女たちにとって日常生活の「言葉」であった。必ずしも明確に意図しているわけでもなくとも、「女性」として「民族」を語るものとしてチマチョゴリ制服がある。特に通学路などの学校外では、日本社会に対する自己表現の手段として、それが2世から3世へと受け継がれてきた。

母から娘に受け継がれてきたチマチョゴリ制服は、その子どもの4世に継承されていく途中で、少なくとも通学路では不可視化されてしまった。そこには世代の変化（内部要因）のみならず、日本社会の変化（外部要因）が大きく影響している。国籍条項による差別問題が徐々に解消されてきたにもかかわらず、「北朝鮮フォビア」は深刻になる一方で、それが朝鮮学校の学生に投影される問題は変わらないどころか、一層悪化している。2世や3世の女性たちが「当たり前」に着てきたチマチョゴリ制服が他者によって「侵害」され、それは子どもが通学路でチマチョゴリ制服を着ることを止めざるを得ない母親の「葛藤」をうんだ。

だからと言って「負けない」精神の継承が中断されたわけではない。日本社会では依然として朝鮮学校の制度的排除が続いており⁽⁴⁷⁾、朝鮮学校に向けられたヘイトスピーチもあふれるなかで、3世のオモニ（母親）たちは、さまざまな負担を抱えながらも朝鮮学校に子どもを通わせ、オモニ会で力を合わせて朝鮮学校や学生を支えるような育児のあり方から、卒業式にチマチョゴリ姿で参加したり、子どもに自分のチマチョゴリ制服の思いを伝えたりするような日常的な実践を通じて、新たな形での「負けない」精神を子どもに伝えている⁽⁴⁸⁾。

5. おわりに：チマチョゴリ制服に「抵抗」の意味がなくなる時

朝鮮学校の教育に求められる「日本で朝鮮人として生きる」ということを、文字どおり「身につけるもの」として象徴していたのがチマチョゴリ制服であった。朝鮮学校的女子学生たちは、「上」から決められたものを自分たちのものとしてサブカルチャー化し、女性が民族を「見せる」ものとして自律的にチマチョゴリ制服を着用してきた。在日朝鮮人は他の日本人と同じような服装で、同じように話していれば、日本社会でパッシングすることも可能である。そのため、日本の文化からすると「異質」なものとしてのチマチョゴリ制服は「出る杭」となり、攻撃される目印になってきた。そこには、学生たちが持つチマチョゴリ制服の意味とは全く異なる「敵」や「排除すべきもの」としての意味が恣意的に付与された。「外」の日本社会においてチマチョゴリ制服の着用が

危険であるという空気のなかで、「上」の総連や朝鮮学校側から着用しないことを迫られても、学生たちは着続けようと抵抗した。それは世代を超えて受け継がれてきた「負けない」精神の表出であった。「負けない」精神とは、勝ち負けの問題ではなく、自分として生きるためのマイノリティ女性の連帯をうみだす力であり、それ自体が〈生きる方法〉である。

今後の課題について述べておきたい。第二制服が登場してから「衣服」を通じた朝鮮学校の女子学生たちのエイジェンシーはかたちを変えたと思われる。第二制服を着る女性たちは、相変わらずチマチョゴリ制服をめぐるサブカルチャーを引き継ぐ場合もあれば、昔ほど手入れをしない場合もある。前者はチマチョゴリ制服をめぐる実践が現代にも受け継がれていると言えるが、後者の場合は、チマチョゴリ制服に対する思いが変わってしまったとも言えるだろう。とはいえ、筆者は「昔ほど大事にしない」というのも抵抗の積極的な行為と考える。なぜなら、それがチマチョゴリ制服を通学路で着用できないことへの「静かな抵抗」として解釈できるためである。

第二制服の登場によって、チマチョゴリ制服が攻撃されることはもうないだろう。少なくとも女子学生のみが制服によってリスクを負わなければならない実態は回避できている。近所に住んでいる日本人ですら「朝鮮学校がなくなったと思った」と言うほど（板垣編 2019: 139）、第二制服の導入はある種の「パッシング」の役割を果たしたのである。第二制服の白シャツに学校のマークを白の刺繍で入れる⁽⁴⁹⁾など、朝鮮学校の標識はより目立たないかたちになっていいる。しかし、それでも朝鮮学校へのヘイトや差別がなくなったわけではない。2002年、日朝首脳会談後から「北朝鮮フォビア」はより強くなった。2009年12月に在特会が京都の朝鮮学校前で人種差別的な暴言を吐き、器物破損などの暴力行為に及んだ。そして、2017年にも政治活動に偽装したヘイトスピーチがたれながされるなど、問題は依然として続いている。日本政府は総連や「北朝鮮」との関係から、朝鮮学校の学生をさまざまな政策から除外対象としている。まるでチマチョゴリ制服を切り裂いた加害者たちと同じように、朝鮮学校の学生であることだけで排除している。朝鮮学校の処遇の不当さを訴えるあらゆる場面で、朝鮮学校の学生たちが（チマチョゴリではないにしても）制服を着ている姿をまた目にする事になっている。日本社会が与えた排除と同化に対抗するために、チマチョゴリ制服とはまた異なったかたちで抵抗せざるをえない状況が依然として続いている。チマチョゴリ制服が「抵抗」の意味を持たなくなるのは、日本社会において朝鮮学校とその学生が差別の対象ではなく、「ともに生きる」存在になったときであろう。

注

- (1) 本稿は書き下ろしの論文だが、一部、板垣竜太編（2019: 129-140）に筆者が書いた補論と重複すると

ころがある。

- (2) 日本の教育制度では児童・生徒・学生の区別があるが、朝鮮学校では初級部から高級部、大学にいたるまで共通して「学生」(ハッセン)と呼ぶ。本稿では、朝鮮学校での呼称にしたがう。
- (3) ここでは、フォーコーの主体概念のように権力に従う(しかない)主体の行為と同時に権力に抵抗(しようとする)主体の行為をエイジェンシーとして取り上げる。行為者(agent)の行為(action)として発現するものを、能動性や受動性を問わず、エイジェンシーとして考える。
- (4) センスメイキングとは、1979年カール・ワイク(K. Weick)によって注目され、1995年以降に急速に発展した組織論の理論体系である。各自が持つ世界に関する主観的な理解が決定的に重要であることを前提に、それぞれの構成員独自の判断軸を活かしながら、それを組織の目指す方向性に統制することを探求する(琴坂 2018:345-348)。朝鮮学校の学生たちが制服を通して集団としてもアイデンティティを形成していく一連の過程は、組織論におけるセンスメイキングの典型として考えることができる。しかし、組織論におけるセンスメイキングは、組織の形成とリーダーの役割に焦点を当てるため、「上」からは逸脱と見られる制服文化や、組織の外部からの偏見に満ちたまなごしに対抗してチマチョゴリ制服に自ら意味を見出し、それを着続けようとした学生の抵抗は説明できない。そのため、本稿では学生によるセンスメイキングを「意味付与」として、組織論におけるセンスメイキング理論と区分して用いる。
- (5) 2016年から2022年までのインタビュー調査にもとづく。詳しい調査方法は引用ごとに記す。
- (6) 〈生きる方法〉とは、差別をうみだす社会構造のなかで生きる人々のエイジェンシーにみられる、必ずしも計画的・意図的な行為のみならず、そうしなければ生きられないことから構築される人間の生き方を示す。詳しくは、金汝卿(2020)を参照されたい。
- (7) キリスト系私立女学校の場合、梨花学堂は初期には赤色の服を制服にしたが、次第に自由になった。培花女学校は高等普通学校に昇格しながら黒のチマと白のチョゴリを制服に指定した。一般私立女学校の場合、淑明女学校は本来チマチョゴリだったのが1931年に廃止され、制服が指定された。また、進明女学校は1920年末までは制服がなかったが、1930年代に洋装制服が登場し、1939年までの間、チマチョゴリと洋装制服を学生が自由に選択できるようにした。同徳女学校は1921年、白のチョゴリに黒のチマを制服にし、1925年にはチマにあった白線をなくしてブリーツにし、校章をチョゴリに付けるようにした。官公立学校の場合は、上と下を黒色や紺色に統一した在来式のチマチョゴリを制服にしていたが、1928年から1942年までは洋式のスカートとブラウスが指定された(전언후 2002: 205-208)。
- (8) ウトロの朝鮮人学校は「朝連西陣小学校・久世分校」として認可されていたが、1949年10月朝鮮人学校閉鎖令の後、1949年12月に閉校され、小倉小学校の民族学級として分散された(中村 2022: 69-88)。また、朝連西陣小学校は1950年3月の卒業式後に閉校された(松下 2020: 185)。
- (9) 在日韓人歴史資料館(2008)や映画「朝鮮の子」(1955)など。
- (10) GHQと日本政府の朝鮮人学校閉鎖に抗議する教育闘争があり、国籍条項による差別、社会的差別によって貧困状況におかれる在日朝鮮人が多い中で、朝鮮民主主義人民共和国から手紙と朝鮮学校への教育援助費が送られ、1959年12月から始まった帰国運動によって「祖国熱」がより高まった時期である。
- (11) CMさん(1962-65年在学)、2019年10月11日インタビュー調査。
- (12) トンチマとは、無彩色でブリーツが多く、膝下程度の長さのスタイルを示す(図3参照)。足首までの長さでブリーツがない従来のスタイルより動きやすいため、若い世代に愛用されてきた。
- (13) S先生(1966-92年在職)、2018年10月15日インタビュー調査。
- (14) KHさん(1989-1995年在学)、2021年8月21日インタビュー調査。
- (15) GSさん(1984-90年在学)、RKさん(1984-87年在学)、SHさん(1987-93年在学)、MAさん(1990-93年在学)を対象に行った2018年8月3日のワークショップ。当時、朝鮮学校の高級課程に子どもを通わせている母親4人を対象にワークショップを実施した。詳しい内容は板垣編(2019)を参照されたい。
- (16) GSさん(1984-90年在学)、上掲の2018年8月3日のワークショップ。

- (17) P 先生（1974-77 在学，1983-現在在職中），2022 年 7 月 1 日インタビュー調査。
- (18) だからこそ、「強さ」の象徴となった「三ペン」バッジが日本人高校生のなかでも売り買いされていたという（板垣編 2020: 113）。
- (19) YM さん（1958 年生），2016 年 10 月 28 日インタビュー調査。朝鮮学校の初級課程ではチマチョゴリを制服として着用しないが，児童のなかには自分のチマチョゴリを着て学校に来ることも少なくなかったという。現在の初級課程は洋服スタイルの制服を着用しているが，いつからなのかは不明である。京都市西部所在の学校の場合，1982 年卒業生の卒業写真から 2022 年現在と同様の制服が確認できる。
- (20) 1973 年 7 月に拓殖大学十数人が東京中高中生 5 人を暴行した事件（『毎日新聞』1973 年 7 月 13 日東京朝刊），1974 年 1 月に国士舘高校生と朝鮮学校の学生が新宿駅ホームで口論から喧嘩になった騒動（『朝日新聞』1974 年 1 月 27 日朝刊）などが確認できる。
- (21) 金英（2003: 158）によれば，朝鮮学校や朝鮮学校学生を対象にした脅迫などを含めた事件は，1989 年 10 月「パチンコ疑惑」時は 20 日間 48 件，1994 年 4 月「核疑惑」時は約 3 ヶ月間に約 160 件，1998 年 8 月「ミサイル騒動」時には半年間に約 70 件，2002 年 9 月「拉致問題」時は約半年間に 321 件発生した。
- (22) キーワード検索は，「朝日新聞クロスサーチ」（1984 年 8 月からの本紙，1988 年 6 月からの地域面），毎日新聞社のデータベースの「毎索」（1972 年 3 月からの本紙・地方版）を用いている。ただ，キーワード検索では検出できない新聞記事もあるため，実際には反映されていないものもあると思われるが，報道件数に関しては「朝鮮学校」をキーワードにしたものに限って集計した。
- (23) 図 4 をみると『毎日新聞』に比べ，『朝日新聞』での報道件数が 2 倍近く多い時期もある。
- (24) 上記の新聞 2 社と『読売新聞』および『世界』『部落』『現代コリア』などの雑誌を含む。
- (25) 本論文では，朝鮮民主主義人民共和国の正式名称を表記することを原則にしているが，本章においては日本社会による意味付与を考えているため，日本社会で通用している略称の「北朝鮮」を括弧付きで表記する。
- (26) チマチョゴリ制服が攻撃された事件を言及している記事は 7 件あるが，そのうち 2 件だけが「朝鮮学校」をキーワードとして用いているため，図 4 の値には反映されていない記事もある。この時期の『朝日新聞』では，朝鮮学校を「在日朝鮮人の学校（『朝日新聞』1987 年 12 月 28 日朝刊）」や「朝鮮民主主義人民共和国系の中高級学校（『朝日新聞』1987 年 12 月 22 日朝刊）」のように表記する場合も少なくなかった。
- (27) 『朝日新聞』1989 年 9 月 15 日朝刊，『朝日新聞』1989 年 10 月 10 日朝刊，『朝日新聞』1989 年 10 月 14 日朝刊，『週間アエラ』1989 年 10 月 24 日，『朝日新聞』1998 年 11 月 1 日朝刊をもとにまとめる。
- (28) 『朝日新聞』1989 年 10 月 18 日夕刊，『朝日新聞』1989 年 10 月 21 日朝刊。警察庁警備局長は，朝鮮総連は過去に暴力主義的破壊活動を行った団体の前身として同様の行為をとる「危険性がある」と答弁し，「朝鮮総連が北朝鮮と密接な関係があるため関心があり，「ラングーン事件や大韓航空機事件を北朝鮮が起こしたことは，周知の事実である」と発言した。
- (29) 『毎日新聞』1989 年 11 月 26 日朝刊，『朝日新聞』1989 年 11 月 30 日朝刊。
- (30) 板垣（2012）は「北朝鮮」に関係することであればなんでも批判できる今日の日本社会の状況を「北朝鮮フォビア（North Korea-Phobia）」という。その状況が朝鮮学校の学生を対象にしたヘイトクライムに繋がっている。
- (31) JR の学割運賃制度が設けられた 1968 年から「家計負担の軽減」を目的として導入された。「学校教育法」にもとづいて運賃が設定された結果，学校間で格差が生じ，朝鮮学校は「学校教育法第 1 条で定める学校ではない」との理由から，12 歳以上を大人扱いで割引ゼロ，それ未満は 50% 引きとした。この運賃体系は民営化後にも引き継がれたが，1994 年 1 月に JR 各社が朝鮮学校学生の通学定期の割引率を一条校並みにすることを決定した（イオ編集部 2013 年 2 月 21 日）。
- (32) 朝鮮学校の高体連加盟問題は 1990 年，大阪朝鮮高級学校的女子バレーボール部が大阪高体連への新規加盟を認められ，府の春季大会へエントリーし，大阪朝鮮高級学校が 1 次予選を突破し，2 次予選出場を決めた。しかし，「規約上，朝鮮高級学校は高体連へ加盟できないことに気づいた。大会には出場できない」として，朝鮮学校を加盟校から除外した。この問題が運動として展開され，まず 1991 年 3

- 月には高野連（日本高校野球連盟）が外国人学校に門戸を開いた。高体連は1993年5月の理事会で、朝鮮学校を含む専修・各種学校に対し全国高等総合体育大会（インターハイ）への参加を認め、同年11月の理事会で正式決定した。1994年に初めて朝鮮学校の学生が高体連の大会に出場した（イオ編集部 2021年1月7日）。
- (33) 1994年の246件の記事に「北朝鮮」をクロス検索すると54件がヒットする。この年の「北朝鮮」と朝鮮学校を関連付けた記事の数は、日朝首脳会談のあった2002年に次いで多かった。
- (34) 『朝日新聞』1998年5月6日夕刊、『朝日新聞』1998年5月7日朝刊、『朝日新聞』1998年5月12日朝刊、『朝日新聞』1998年5月15日朝刊、『朝日新聞』1998年5月30日朝刊、『朝日新聞』1998年6月17日朝刊をもとにまとめる。
- (35) 1998年に報道された「北朝鮮」関連報道のうち、ミサイルに言及したのは585件で、9月に390件の記事が集中していた。
- (36) 今日の朝鮮学校の問題を論じる際、2002年日朝会談後の日本社会の「北朝鮮フォビア」をあげることが多く、朝鮮学校をとりまく人々も2002年を一つの転換期としてあげることが多い。第二制服が登場した後であるため、ここでは詳しくとりあげないが、詳細は板垣（2012）や山本（2020）などを参照されたい。
- (37) Emcke（2016=2018: 75）から再引用。
- (38) きむ・むいは、1994年の事件をあげながら朝鮮学校の学生を攻撃したという被害届け22件のうち、チマチョゴリ制服をターゲットにした被害は12件、犯人が捕まったのは2件であることに触れながら、朝鮮学校側の主張に比べて被害件数が少ないことを提起していた（「チマチョゴリ切り裂き事件の疑惑」『宝島30』1994. 12: 34）。
- (39) 例えば「パチンコ疑惑」時には、総連が「パチンコ疑惑」を否認する声明を発表し（『朝日新聞』1989年9月30日朝刊）、「北朝鮮」の紙面からパチンコ疑惑を論評する（『朝日新聞』1998年10月2日夕刊）などの記事がみうけられる。
- (40) 藤井（1996）によれば、こうしたヘイトクライムは「人種差別」であったにもかかわらず、「器物破損」でしか対応できず、略式起訴され、罰金刑で済まされる場合が多い。それは人種差別とジェンダー差別に対する法的フレームの不在に起因するものであり、交差性に関わる一例とも言える。
- (41) 韓丘庸 1994, 日垣 1991, 富沢 1994, 下嶋 1994, 『朝日新聞』1994年6月9日朝刊、『朝日新聞』1998年9月10日東京朝刊、『朝日新聞』1999年3月6日朝刊など。
- (42) 全国的にチマチョゴリ制服での通学を控えるような指示が出された時期は不明であるが、京都の場合、女子学生が集団的に反対行為を行ったことは1987年の事例が最初だと考えられる。
- (43) MCさん、2021年9月11日インタビュー調査。
- (44) WMさん、2017年3月29日インタビュー調査。
- (45) 〈支配のマトリックス〉とは、抑圧の交差性が構造的に組織されるプロセスを示す。人種、階層、宗教、ジェンダーなどが交差して構成される支配のマトリックスは、構造的領域で抑圧を生み出し、規律の領域で抑圧の持続を管理し、ヘゲモニーの領域で抑圧を正当化し、対人関係の領域で日常生活と個人の意識に影響を及ぼす（Collins 2009: 294）。
- (46) 宋（2014）などを参照にされたい。
- (47) 高校無償化制度から朝鮮学校の学生のみが除外されたり、幼児教育・保育の無償化に各種学校認可の外国人幼保施設が適用外になったり、各自治体の教育補助金制度の対象外になるなどの問題を抱えている。
- (48) チマチョゴリのみならず、様々な表象がある。母親から子どもに継承するものとしては、朝鮮学校の母親たちの学校と学生を支える活動があげられる。たとえば、自分の子どものみならず朝鮮学校の学生たちを「ウライイ（私たちの子ども）」と呼びながら、自分の子どものみならず、他の学生とも親しみを持って接するような実践をしている。こうした行為は朝鮮学校ならではの文化でもあるが、助け合う〈生きる方法〉であり、それを子どもたちが学校生活のなかで日常的に接することで受け継いでいくと言える（金汝卿 2020）。
- (49) P先生（上掲の2022年7月1日）のインタビューにもとづく。京都朝鮮中高級学校の場合、1999年に

導入された第二制服はすでにあった男子学生たちの制服デザインに合わせた。ブラウスも学則で決めており、校章を白の刺繍で入れることで区別しているという。

参考文献

- 朝鮮時報取材班編（1990）『狙われるチマチョゴリ——逆国際化に病む日本』柘植書房新社。
- 朝鮮人学生に対する人権侵害調査委員会（1994）『朝鮮人学生に対する人権侵害調査委員会』在日朝鮮人・人権セミナーマスコミ市民。
- Collins, Patricia Hill. [2000] 2009, *Black Feminist Thought: Knowledge, Consciousness, and the Politics of Empowerment*, New York: Routledge.
- Crane, Diana, 2000, *Fashion and its Social Agendas: Class, Gender, and Identity in Clothing*, Chicago, the University of Chicago Press.
- Crenshaw, Kimberle, 1991, Mapping the Margins: Intersectionality, Identity Politics, and Violence Against Women of Color, *Stanford Law Review*, 43(6) : 1241-1300.
- Emcke, Carolin, 2016, *Gegen den Hass*, FISCHER, S. (浅井晶子訳 (2018) 『憎しみに抗って——不純なものへの賛歌』みすず書房)。
- 林雅行（1990）『天皇崇拜——教師と子どもたち』柘植書房新社。
- 韓東賢（2006）『チマ・チョゴリ 制服の民族誌——その誕生と朝鮮学校の女性たち』双風舎。
- 韓丘庸（1994）「狙われるチマ・チョゴリと民族教育——日本人の『国際感覚』を疑う」『部落』45(9) : 38-42。
- 日垣隆（1991）「チマチョゴリへの視線」『世界』526: 310-329。
- 藤井誠二（1996）「『チマチョゴリ切り裂き』が、『器物破損』！？」『社会民主』494: 130-134。
- イオ編集部（2013）「『全国大会』参加の訴えは、大阪から——はじまりの歴史を振り返る」『月間イオ』（2022年8月2日アクセス, <https://www.io-web.net/ioblog/2021/01/07/83809/>）。
- イオ編集部（2021）, 「『オモニパワー』がリードした運動～vol.3 JR 通学定期券割引率差別の是正」『月間イオ』（2022年8月2日アクセス, <https://www.io-web.net/2013/03/「オモニパワー」がリードした運動～vol-3-jr 通学定期/>）。
- Itagaki Ryuta. 2012, North-Korea-Phobia in Contemporary Japan: A Case Study of Political Attacks on Korean Ethnic schools, 『龍谷大学矯正・保護総合センター研究年報』(2) : 76-85.
- 板垣竜太編（2019）『朝鮮学校と銀閣寺——京都朝鮮中高級学校と地域社会との関係をめぐって』同志社大学社会学部社会学科・社会調査実習報告書。
- 編（2020）『朝鮮学校と銀閣寺2——京都朝鮮中高級学校と地域社会との経験を掘り下げる』同志社大学社会学部社会学科・社会調査実習報告書。
- 전언후 (Jeon Eonhu) (2002) '일제시기 여학생 의식 연구 (日本植民地統治時代の女学生意識研究)', 이화사학연구 (梨花史学研究) : 195-216.
- 姜誠（1995）『パチンコと兵器とチマチョゴリ——演出された朝鮮半島クライシス』学陽書房。
- 金漢一（2005）『朝鮮高校の青春——ボクたちが暴力的だったわけ』光文社。
- 김미래 (Kim Mirae) (2009) '20 세기 여자 저고리, 치마의 형태 변천과 요인 분석 (20世紀女子チョゴリ, チマの形態変遷と要因分析)' 성균관대학교 일반대학원 석사논문 (成均館大学一般大学院修士論文)。
- 김수진 (Kim Sujin) (2007) '여성 의복의 변천을 통해 본 전통과 근대의 젠더정치 (女性衣服の変遷を通じてみた伝統と近代のジェンダー政治)', 페미니즘연구 제7권 2호 (フェミニズム研究 第7巻2号) : 281-329.
- 金榮（2003）'조선적으로 산다는 것 (朝鮮籍で生きるということ)' "여성과 평화" 3: 141-162, 한국여성평화연구원。
- 金汝卿（2020）「民族教育の『母』であること——朝鮮学校のオモニ会にみられる女性の〈生きる方法〉」『ソシオロジ』65(1) : 23-39。
- 이주호 (Lee Juho) (2019) '1950~1960년대『조선녀성』을 통해 본 북한 인민의 의복 문화: 사회주의 이행기 일상생활 변화의 시론적 검토 (1950~1960年代『朝鮮女性』を通してみた朝鮮民主主義人民共和

- 国人民の衣服文化：社会主義移行期の日常生活変化の試論的検討）’, 東方学志（189）：367-396。
- 松下佳弘（2020）『朝鮮人学校の子どもたち』 六花出版。
- Max Horkheimer and Theodor W. Adorno, 1947, *Dialektik der Aufklärung: Philosophische Fragmente*, Querido.
（徳永恂訳（2007）『啓蒙の弁証法 哲学的断想』 岩波文庫）。
- 中村一成（2014）『ルポ 京都朝鮮学校襲撃事件——〈ヘイトクライム〉に抗して』 岩波書店。
———（2022）『ウトロ ここで生き、ここで死ぬ』 三一書房。
- 難波知子（2012）『学校制服の文化史——日本近代における女子生徒服装の変遷』 創元社。
- 西岡力（1997）『コリア・タフ* を解く』 亜紀書房。
- 野中葉（2015）『インドネシアのムスリムファッション——なぜイスラームの女性たちのヴェールはカラフルになったのか』 福村出版。
- 呉圭祥（2015）『記録・朝鮮総連 60 年 1955. 5-2015. 5』 私家版。
- 呉鳴夢・成大盛（2007）「解放後の初期在京都朝鮮民族教育（一九四五～一九五〇）」『社協京都会報』（9）：112-139。
- Ross, Robert J. 2008, *Clothing: a global history: or, the imperialists' new clothes* Cambridge, U. K.: Polity.（平田雅博訳（2016）『洋服を着る近代——帝国の思惑と民族の選択』 法政大学出版局）。
- 佐藤秀雄編（2005）『教育の文化史 2——学校の文化』 阿吽社。
- 宋恵媛（2014）『「在日朝鮮人文学史」のために——声なき声のポリフォニー』 岩波書店。
- 下嶋哲朗（1994）『「チマ・チョゴリ切り裂き事件」を追う——日本人は変わらないか』『世界』 601: 185-203。
- 富沢よし子（1994）「チマ・チョゴリを晴れやかに——日本社会の差別の土壌を掘りくずす」『世界』 599: 126-129。
- Weick, Karl E., Kathleen M. Sutcliffe, and David Obstfeld., 2005, ‘Organizing and the process of sensemaking’, *Organization science*, 16(4) : 409-421.
- 在日朝鮮中・高級生に対する人権侵犯事件調査団編（1963）『在日朝鮮中・高生に対する人権侵犯事件調査報告書』 在日朝鮮中・高級生に対する人権侵犯事件調査団。
- 在日朝鮮人の人権を守る会準備会（1963）『在日朝鮮人は理由なしに殺傷されている——在日朝鮮中高生に対する暴力殺傷事件の全ぼう』 在日朝鮮人の人権を守る会準備会。
- 在日韓人歴史資料館（2008）『写真で見る在日コリアンの 100 年』 明石書店。
- 山本かほり（2022）『在日朝鮮人を生きる——〈祖国〉〈民族〉そして日本社会の眼差しの中で』 三一書房。

Why Did They Keep Wearing Traditional Korean-style Uniforms?:

On the Resistance of Female Students in Korean Schools in Japan

Yeokyung Kim

The female students in Korean ethnic schools (Chosŏn hakkyo) in Japan started to wear Korean-style uniforms, which were in fact traditional Korean clothes, beginning in the 1960 s. However, around 1990, the hate crimes against those wearing Korean-style uniforms during commuting began to increase rapidly. Eventually, Korean students adopted Western-style uniforms for commuting and changed into Korean-style uniforms at school.

These students have a specific Korean uniform culture, having kept wearing these uniforms despite the possibility of attacks. As such, Korean-style uniforms became a nonverbal means of their agency against the *matrix of domination*. The school was one factor in deciding whether women could wear traditional Korean clothes as school uniform as an ethnic symbol; another factor was racism, as some people who saw the uniforms as markers of Korean ethnicity attacked the wearers, driven by their *North-Korea-Phobia*.

This article discusses *sense-making* by students considering their use of Korean-style uniforms and *labeling* by the Japanese society by taking into consideration the hate crimes against female students. As examples of such encounters, I consider *the art of living* originating from the resistance of female students at a Korean ethnic school in Kyoto by continuing to wear Korean-style uniforms in 1988 in direct opposition to the school's decision to ban such attire to protect students from racism.

Key words: Korean women in Japan, Korean ethnic school, Traditional clothes, Sense making, Intersectionality

